研究会報告

『東アジアの租界とメディア空間』研究会

「第5回外国人居留地研究会全国大会 in 長崎　2012」

日時：2012年10月20日（土）、21日（日）
会場：活水女子大学　本館大チャペル

内田　青蔵（非文字資料研究センター研究員）

10月20日・21日、長崎市の活水女子大学を会場に、第5回外国人居留地研究会全国大会が開催された。開国後に設けられた居留地が存在した函館・東京築地・横浜・大阪川口・神戸・長崎をそれぞれ拠点として活動している各地の研究会では、年に一度集まって全国大会を開催している。今年度は、一日目は各地の研究会の活動報告に加え、上海東華大学外語学院教授の陳祖恩氏が来日し、「上海租界の文化と社会について」と題して特別報告を行った。各地の報告後は、居留地研究の深化をめざしてパネル・ディスカッションが行われた。そして、二日目は、長崎の居留地の遺産として現存する建築・土木関係遺構を見て歩くというエクスカーションを実施した。なお、シンポジウムのテーマは、「異文化の出会い―居留地における伝道・外交・貿易」で、基調講演は地元長崎の研究会会長を務める長崎総合科学大学教授のブライアン・バークガフニ氏が「長崎における日英の出会いと居留地の誕生」と題して行った。ブライアン氏自身、カナダ出身の外国人であり、日本という異文化圏での生活の面白さや難しさを実体験して得た独自の視点から、長崎の日英両国の交流を通して幕末期の長崎居留地を紹介した。

さて、本学非文字資料研究センターに設置されている『東アジアの租界とメディア空間』では、第4回目の外国人居留地研究会全国大会から参加し、今年度は班代表の大里浩秋をはじめ内田青蔵および栗原純の3名が参加し、大里教授が横浜居留地研究会を代表して報告を行った。その内容は、「横浜居留地と中国各地の旧日本租界」と題したもので、大里教授を中心にこれまで神奈川大学21世紀COEプログラム並びに神奈川大学非文字資料研究センターで行ってきた中国の日本租界に関する研究の概要報告であった。その報告は、横浜居留地に関するものではなかったものの、これまでの外国人によってもたらされたものといういわば固定化された居留地研究の見方に対し、日本が設けた日本租界の研究の存在を示すことで、複眼的視点による居留地研究の可能性を示唆したものでもあったといえる。今年度は偶然にも、陳祖恩氏による上海租界の報告もあったが、両氏の報告はまさにわが国の今後の居留地研究の新たな可能性を示したものとして注目されよう。また、シンポジウムに際して行われたパネルディスカッションでは、長崎の出島や唐人屋敷とその後の居留地との関連性などが話題となった。この議論の視点も、居留地を海外からもたらされた異文化としてだけではなく、過去との連続性という観点から見直す必要性を示すものでもあった。

二日目のエクスカーションは、重要文化財に指定されている旧香港上海銀行長崎支店前に集合し、長崎居留地研究会会長並びに副会長であるブライアン・姫野順一両氏の解説で始まった。旧香港上海銀行長崎支店、旧長崎英国領事館の建物を眺めつつ旧居留地の変容の様相の解説を聞き、オランダ坂を上って東山手甲13番館、東山手12番館を見学した。東山手では他に、居留地境石碑柱や英国聖公会会堂碑及び旧英国領事館坂道を確認しながら明治20年代の建築遺構である東山手洋風住宅群を眺めた。その後、斜行エレベーターで南山手に上り、南山手乙27番館、祈念坂そして最後に大浦天主堂を見学して終了した。幕末から明治初期の古写真で見た長崎居留地の風景を確認する散策でもあり、われわれ租界研究にとっても有意義な一時であった。

写真1　報告されている大里教授

写真2　エクスカーションの様子